

分科会報告書

ごみゼロ・資源循環

- 第1分科会 討論！ごみゼロ社会の実現を目指して・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 第2分科会 活性化！菜の花で地域をつなぐ・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 第3分科会 検証！どうするプラスチック・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 第4分科会 生ゴミは宝だ！・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 第5分科会 自治体の生ごみ分別取り組みノウハウ・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 第6分科会 検証！メタン発酵システムの到達点・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 第7分科会 メタンプラントを核にした地域循環・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

脱温暖化

- 第8分科会 木の時代がやって来た！・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
- 第9分科会 確実にCO2排出減！・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 第10分科会 転換期にある自治体環境マネジメント・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- 第11分科会 持続可能な地域を支える交通政策・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

環境学習・地域の自然

- 第12分科会 水と緑と命のつどい・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- 第13分科会 ごみと私たちの暮し・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 第14分科会 微生物から見た地球・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
- 第15分科会 ちっこ掘割物語・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
- 第16分科会 むつごろうの棲む筑後川の環境特性・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

食・農・環境

- 第17分科会 環境自治体なら「弁当の日」をやらなくちゃ・・・・・・・・ 17
- 第18分科会 環境支払いの政策を地域からつくる・・・・・・・・ 18
- 第19分科会 農村再生！本当の豊かさは農村にある・・・・・・・・ 19

第1分科会	討論！ごみゼロ社会の実現を目指して	会場：大木町こっぽーっとホール（大木町）
参加者：105人	～ゼロウェイスト宣言と拡大生産者責任の確立～	時間：9時30分～16時40分
本分科会の概要	<p>話題提供者 妹川征男氏の報告概要 長年遠賀川流域で清掃活動のボランティアを行って行く中で、ポイ捨て防止と拡大生産者責任（EPR）を達成させるためには、デポジットの法制化が不可欠である。</p> <p>話題提供者 田中利和氏の報告概要 水俣エコタウンでビンのリユース事業に取り組む傍ら、南九州からリユースシステムの普及に取り組んでいる。リユースを今後進めるためには、拡大生産者責任（EPR）やリサイクル瓶製品を安くする制度などの整備が必要である。</p> <p>話題提供者 岩月宏子氏の報告概要 名古屋では最終処分場問題を皮切りに、市民と共同のゴミ減量の取組みが進んだ。また、市民・事業者・行政が対等な関係（しみん）で問題解決を図る取組（協働）について報告された。</p> <p>話題提供者 中ノ森慎一氏・久良木登氏の報告概要 大木町議会から、拡大生産者責任・デポジット制度の法制化を求める行動についての経過報告及び町が行っている資源化（リサイクル事業）の取組について報告された。</p> <p>首長意見交換会 それぞれの自治体から、取組みの内容や抱えている課題等の報告があった。コーディネーターの広瀬氏が、今後ゼロウェイストを広めていくためのネットワークづくり、住民協働の重要性を指摘した。</p>	<p>分科会参加者からの主な意見（質疑）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（茨城県からの参加者）今後環境に対する意識を高めることが非常に大切である。特に若い世代への環境教育が必要ではないか。 →ごみを出さない・生まない教育は必要である。また、デポジットやEPRを法整備にすることにより、ごみを捨てることもなくなる。 ・（熊本県からの参加者）名古屋でのしみん提案会議での目標の共有と達成のためのプロセスにおいて大事にされたポイントや課題は？ →既存団体や声なき声を拾うために委員選出にも配慮が必要。また、市民能力を向上するための役割分担やフォローアップが重要である。
	<p>まとめの内容</p> <p>ゴミゼロのまちづくりをすすめ、ゼロウェイスト宣言の自治体を広めていくためには住民協働が欠かせない。今後とも、情報共有と協働の取組みを進めるネットワークづくりが重要である。</p>	
		
コーディネーター	片山純子（ワーカーズ・ゴミ問題研究会）広瀬立成（町田発・ゼロウェイストの会） 藤本延啓（熊本学園大学）	
コメンテーター	妹川征男（I LOVE 遠賀川流域デポジット法制化を求める事務局）、田中利和（株式会社田中商店「エコポ水俣」専務）、岩月宏子（あいちゴミ仲間ネットワーク会議代表）、中ノ森慎一（大木町議会議長）、久良木登（大木町職員）、笠松和希（徳島県上勝町長）	
パネラー	村田均（北海道斜里町長）	森英二（神奈川県葉山町長）
	石川潤一（福岡県大木町長）	

第2分科会		活性化！菜の花で地域をつなぐ		会場：大木町子育て支援センター（大木町）		
参加者： 80人				時間：9時30分～12時30分		
本分科会の概要	<p>話題提供者 草水博己氏の報告</p> <p>鹿屋農業高校では資源循環型の形成を目指した「かのや菜の花エコプロジェクト」を展開。平成20、21年度はスーパー専門高校に指定され全6学科の特性をプロジェクトに活かし、地域の小中学校、企業等とも連携。</p> <p>話題提供者 今村利光氏の報告</p> <p>菜種栽培、菜種油の製造販売に挑戦。栽培作業の中で子供会、老人会と協力し多世代コミュニケーションを図っている。菜の花畑を利用した「菜の花さるこいウォーキング」を開催し地域のイベントとして定着しつつある。今後は栽培面積の拡大、BDFの活用、イベントの育成に期待。</p> <p>話題提供者 和田久輝氏の報告</p> <p>伝統的しぼり方の油の消費量は増えていない。生産者と消費者をつなぐ環（わ）の定着を願う。今後はかや、椿等を栽培と製品開発も進めたい。</p> <p>話題提供者 野口雅彦氏の報告</p> <p>グリーンコープの理念は食料自給率の向上と日本農業の継続。そのために生産者との直接契約、生産奨励金などをおこなっている。加工食品も国産農産物を使用しているので菜種は必要量には遠い。安心安全な食の提供の為に適正な価格での取引が必要。</p> <p>話題提供者 福田俊明氏の報告</p> <p>NPO法人伊万里はちがめプラン。生ごみのたい肥化と菜の花エコプロジェクトに取り組む。小中校、大学との連携。国際協力事業（タイ）にも取り組む。</p> <p>話題提供者 檜橋保の報告</p> <p>廃食用由を自社回収しBDFに利用。車両が新しくなるとBDFが使用できないものも出てくる。機会の開発サイドとも協力した製品開発が望まれる。</p>			分科会参加者からの主な意見（質疑）	<p>・菜の花で地域の力を感じているか。→地域コミュニティが活発になったように思う。米・麦・大豆にない菜の花の活用を考えたい。</p> <p>・菜の花プロジェクトに取り組んでいる地域は高齢者が元気で医療費が少ないという調査結果があるそうだ。今後、生産者は増えるか？→いると思うが生産工程の中には個人では難しいものもある。</p> <p>・ドイツなどでは廃食用油ではなくヴァージンオイルをそのまま機械に使っているそうだ。日本でも考えられるか？→今は考えていない。ヨーロッパは大量生産。日本では確保が難しい。</p> <p>・個人で生ごみ堆肥を作ることをどう思うか？→EM、段ボールコンポストは本当のたい肥になっているかわからない。発酵し70℃を2カ月保つと雑菌が死滅し安全に使用できる。意識を高める効果はあると思う。</p>	
				まとめの内容	<p>菜の花プロジェクトは個々の団体で素晴らしい活動があるが、一つの団体には限りがある。生産—消費—回収・利用のサイクルを定着させるには各団体間のつながりと消費者とのつながりが必須となる。そのネットワークづくりの推進が望まれる。</p>	
 <p>話題提供者による報告</p>		 <p>コーディネーターによる進行</p>		 <p>話題提供者の方々</p>		
コーディネーター		藤井 絢子（NPO法人菜の花プロジェクトネットワーク）				
コメンテーター						
パネラー		草水 博己（鹿屋農業高校教諭）		今村 利光（大木菜種生産組合）		
		和田 久輝（(有)鹿北製油）		野口 雅彦（生協グリーンコープ連合）		
		福田 俊明（NPO法人伊万里はちがめプラン）		檜橋 保（(株)フチガミ）		

第3分科会	検証！どうするプラスチック	会場：大木町子育て交流センター（大木町）
	参加者：72人 ～プラスチック油化によるリサイクルの可能性～	時間：13時30分～16時50分
本分科会の概要	<p>話題提供者 原 慎一郎氏の報告概要 ごみの排出量、ごみのリサイクル率、廃プラスチックのリサイクル状況をデータで説明。廃プラスチックの油化利用はリサイクルの有効な手法である。</p> <p>話題提供者 梶島 勝己氏の報告概要 一般廃棄物のケミカルリサイクル事業実現に向け取り組みを進め、FCC 廃触媒分解装置により油化事業を本格開始した。廃プラスチックの分別収集が重要である。</p> <p>話題提供者 谷 春樹氏の報告概要 研究で触媒を用いることにより既存油化技術の欠点を克服し、低コストで高品質な油が得られる高効率化油化プロセスの開発を行った。</p> <p>話題提供者 尾形 博文氏の報告概要 油化技術が廃プラリサイクルの要とし技術開発・装置開発に取り組んできた。ケミカルリサイクルともいべきこの「再資源化」こそが、廃プラの有効活用可能な方向である。</p> <p>話題提供者 古賀 利治氏の報告概要 大切な油化資源として、現在、大木町が取り組んでいる家庭から出るプラスチック類の分別収集の内容を紹介。</p> <p>フィールドワーク（現地視察） 油化事業を開始している(有)柳川商事の油化プラントの視察を行い、廃プラから油化までの処理工程など説明を受け、実際、油化された油が確認できた。</p>	<p>分科会参加者からの主な意見（質疑）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（コメンテーターの発言）廃プラ自体の性能性・機能性からみて、ペレットにして燃料にする方法もあるが、油化として利用する方法がやはりいいのか。また、油化装置の小型機の導入に際して、委託料等採算はどうなのか。 →今後の利用用途を考えれば油に戻す方法がいい。また、採算は人口20万人が最低ライン（3市1町）で十分可能。 ・（参加者からの質問）ペットボトル及びびラッピングが資源量としても多いので油化資源にできないか。 →現在、ペット樹脂は機器に支障がある。今後の課題として研究中であり、装置の開発中である。 ・（参加者からの質問）我々の自治体でもプラスチックを油化するか燃料化するべきだと考えているが、この油化装置であれば委託して採算がとれ、事業できるか。 →人口40万人ということなので、十分可能である。是非、油化事業を検討していただきたい。
		<p>まとめの内容</p> <p>ごみゼロの大きな障壁となっている廃プラスチックごみを油に戻し石油代替燃料として利用できれば、化石燃料の使用削減につながり効果的な地球温暖化対策としても有効である。このプラスチック油化によるリサイクルの普及は重要であり、強く望むものである。</p>
		
会場風景（話題提供者発表）	参加者からの質疑	フィールドワーク（油化プラント見学）
コーディネーター	木村 眞実（徳山大学経済学部 准教授）	
コメンテーター	宮路 高光（鹿児島県日置市長）	
パネラー	谷 春樹（北九州 TLO 知的財産部）	尾形 博文（㈱エクアール代表取締役）
	原 慎一郎（環境省九州地方環境事務所）	古賀 利治（大木町役場環境課主査）
	梶島 勝己（(有)柳川商事）	

第4分科会		生ごみは宝だ！～レインボープランと生ごみ分別の実践者たち～	会場:大川市文化センター（大川市）	
参加者:150人			時間:09時30分～16時50分	
本分科会の概要	<p>話題提供者 吉田俊道氏の報告概要</p> <p>生ごみを利用することでおいしい野菜ができる。生ごみが土に菌を増やし、土の生命力が元氣な野菜を作る。生ごみの命が菌の命、野菜の命、そして私たちの命へとつながっている。全国に生ごみから始まる命の循環体験が広がっている。</p> <p>話題提供者 高山洋子氏の報告概要</p> <p>千歳保育園では、生ごみ堆肥による野菜づくりを実践している。年長さんの当番活動とすることで、毎日無理なく続けている。給食の生ごみもほとんど出なくなり、野菜が好きになる子供が増えた。</p> <p>話題提供者 永田タマミ氏の報告概要</p> <p>西牟田エコの会では10年以上EMボカシを使って生ごみの減量に取り組んでいる。活動を続ける中で参加者も増えリサイクルの意識が定着した。一方で、小学生等を含む若年層への啓発活動や、生ごみ処理を生活の中に取り入れる仕組みづくりなどが今後の課題としてある。</p> <p>話題提供者 荻野安子氏の報告概要</p> <p>筑後市では、市民、事業者、行政が一体となってダンボールコンポストの推進を行っている。エコネットちくごでは講習会と相談会を原則毎月行っているが、講習会後のフォローや堆肥化した後のシステムづくりなどの課題がある。</p> <p>話題提供者 加藤昭伸氏の報告概要</p> <p>大川市では、ごみの量を減らすためにダンボールコンポストの取り組みを行ってきた。また、併せて資源ごみの分別についても取り組んだ結果、ゴミの量は減ってきている。</p> <p>特別報告 『生ごみ・いのちをつなぐ循環型社会の創造』菅野芳秀氏</p> <p>レインボープランとは、生ごみを資源として支えあう地域づくりである。最初は少人数の住民から始まり、いろいろな団体、行政、農協へと連携を深めていった。生ごみ活用のまちづくりが、人と人との和の循環、土から土へ還す循環という2つの循環へつながっている。</p>	本分科会の概要	<p>話題提供者 荒木フサエ氏の報告概要</p> <p>大木町では循環のまちをつくる取り組みを行っている。生ごみの分別によりゴミの量は44%削減された。また、おおき循環センター『くるん』では、生ごみ、し尿、浄化槽汚泥をエネルギーと有機肥料に資源化している。バイオマス資源化により、ごみ等の処理費削減にも効果が出ている。</p> <p>フィールドワーク おおき循環センターくるん見学</p>	
			参加者からの意見(質疑)	<p>・人口の規模によって、循環型社会への取り組みがしづらい面もあると思うが、大きな規模ではどうしたらよいか。</p> <p>→循環への取り組みは、小さなまちから徐々に大きなまちへと移行していっている。(八王子、小田原など)大きいなら大きいなりの工夫があると思う。</p>
			まとめの内容	<p>生ごみは資源として活用できるものである。生ごみの分別、資源化は、ごみを減らすだけではなく、循環型共生社会へとつながるものである。</p>
 <p>コーディネーターの基調報告</p>		 <p>特別報告者との質疑応答</p>		
 <p>フィールドワーク</p>				
コーディネーター	吉田俊道（大地といのちの会）、荒木フサエ（あーすくらぶ会長）			
特別報告者	菅野芳秀（長井市レインボープラン）			
コメンテーター	上村清隆（新潟県湯沢町長）			
話題提供者	高山洋子（久留米市千歳保育園副園長）、荻野安子（エコネット筑後）、永田タマミ（筑後市EM）、加藤昭伸（大川市）			

第5分科会	自治体の生ごみの分別取り組みノウハウ	会場：筑後市勤労者家庭支援施設（筑後市）
参加者：67人	～地域ぐるみの循環に取り組んでみよう～	時間：13時30分～16時30分
本分科会の概要	<p>コーディネーター 中村修氏より 「化学変化」＋「社会変換」＝「循環」 化学変化のためのプラントを建設するだけでは生ごみは地域の中で循環していかない。化学変化の過程を経たあとで、肥料として地域の農家に利用され、その農作物が地域で消費される。こうした循環に必要な過程、社会変換への投資（行政職員の育成、配置）が必要。</p> <p>話題提供者 和田真理氏の報告概要 調査結果の報告。焼却ごみの減量が“必要である”と感じている事例が半数以上に対し、焼却ごみの2割を占める生ごみの資源利用の実施事例は1～2割程度である。</p> <p>話題提供者 竹田幸司氏の報告概要 生ごみ資源化のコスト分析の報告。コスト削減の可能性は十分ある。さらに、資源循環に対する効果は高く、環境負荷低減効果もある。市町村はコスト分析を行い、経費を把握することが必要。</p> <p>話題提供者 小泉佳子氏の報告概要 各地の取組事例について報告。実施にあたっては、主導する部門は自治体でも、実践は住民と行政の協働が必要。目的や意義について十分な理解を得ることが重要。</p>	<p>分科会参加者からの主な意見（質疑）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（能勢町からの参加者）生ごみ資源化コスト分析について、収集運搬の回数が変わらなければコストは減らないのでは。 →大木町では生ごみ分別回収に伴い、週2回の可燃ごみ収集を週1回にし、ごみ袋を値上げしたところうまく循環をしている。行政のノウハウを整備する必要がある。 ・（古賀市の参加者）生ごみ分別収集実施にあたり、きっかけが施策へ反映されるまでどれくらいの時間が必要だったか。 →地域の状況により異なる。滝川市では生ごみがこないと稼働しない状況だったので4～5年。似た特性をもつ自治体を参考にするなど調査結果を利用していきたい。
	<p>話題提供者 西俣先子氏の報告概要 生ごみ分別収集を継続して実施している事例について報告。綾町では、何のために実施するのか、目的が明確である。廃棄政策としては効果が少なくても農業、教育に視点を置くと派生効果がある。どういうメリットがあるか考えるべき。実施にあたり地域の特性も考えることが必要。</p>	<p>まとめの内容</p> <p>生ごみ資源化には社会変換が必要。また従来の枠組みとは異なる発想で、広域で協力し役割分担することで生ごみを資源化して、焼却炉を半減、燃やすごみを減らすことが可能になる。</p>
		
コーディネーター	中村 修（長崎大学大学院生産科学研究科准教授）	
コメンテーター	山下 真（奈良県生駒市長）	
パネラー	和田 真理（九州大学大学院日本社会文化専攻博士課程）	西俣 先子（國學院大学大学院 PD 研究員）
	小泉 佳子（アタカ大機株式会社 環境プラント事業本部営業本部営業企画部）	竹田 幸司（環境省九州地方環境事務所）

第6分科会		会場: おおき循環センター「くるるん」
参加者: 54人	検証! メタン発酵システムの到達点	時間: 9時30分~12時30分
本分科会の概要	<p>バイオガスプラントは、生ゴミ・畜産し尿などバイオマス資源の地域循環技術として今後普及する可能性が高いシステムであるが、日本ではまだ実績が少なく、システム上の課題やコストの問題など解決すべき課題も多い。</p> <p>今回、現在国内において運転実績のあるプラントメーカーや研究者などによる技術交流を行い、プラント設置を計画する自治体などに判断材料の提供を行った。</p> <p>最初に熊本大学の木田教授より『海外での持続可能なバイオガスプラントの仕組みと今後目指すべきメタン発酵技術』というテーマで特別報告があった。海外の事例報告があり「バイオガスの普及には、入口（廃棄物をリサイクルする仕組みづくり）と出口（消化液（液肥）等の利用）が重要。また今後は、メタン発酵を地球環境にやさしいバイオマス処理技術にするため、メタン発酵の安定化や硫化水素の阻害軽減等の問題点に対する対応策を講じていきたい。」と話された。</p> <p>次に4社のプラントメーカーと1社のバイオガス発電メーカーからバイオマス関連技術の紹介があり、それぞれ設置した自治体の事例を基に、高温可溶化槽を備えた発酵施設や無攪拌・二層発酵システム、ダブルスクリュウ式熱交換器、また施設内電力自給率100%以上の運転維持やバイオガス機械の小型化といった独自の技術や今後の課題等の報告があった。</p>	<p>分科会参加者からの主な意見（質疑）</p> <p>Q. 農地が少ない大都市でのプラントによるメタン発酵は可能か？ A. 消化液を利用できない場合は、水処理に大変コストがかかるため適しない。乾式メタン発酵の方が適する。</p> <p>Q. 下水道の普及により、当市のメタン発酵施設への投入物がし尿から下水道汚泥へその割合が変わりつつあるが、投入するものが変わってもメタン発酵システムを今のシステムで対応することは可能かどうか？ A. 対応はできる。し尿より下水汚泥の方が異物（毛髪等）の混入が少ないので使いやすく影響は少ないと思われるが、砂の混入が多いため部品の交換やメンテナンスが必要となってくる。</p>
	<p>まとめの内容</p> <p>今回報告をされたどのメーカーとも独自の技術開発により、地球にやさしいバイオマスタウンづくりに貢献している。こうしたメーカーの技術とバイオマスの入口である住民協働、また出口である消化液の利用法があってこそ成功といえるだろう。</p>	
		
木田教授による特別報告	質疑に答える話題提供者	循環センターの見学(フィールドワーク)
コーディネーター	佐藤 純一 (BET JAPAN)	
コメンテーター	宮路 高光 (鹿児島県日置市長)・山下 真 (奈良県生駒市長)	
話題提供者	木田 健次(熊本大学工学部物質生命科学科教授)	斉藤 政宏(三井造船(株))
	山下 繁美(日本ファシリオ(株))	福田 一美(JFE エンジニアリング(株))
	川嶋 淳((株)神鋼環境ソリューション)	林 清史(ヤンマーエネルギーシステム(株))

第7分科会	メタンプラントを核にした地域循環	会場: おおき循環センター (大木町)
参加者: 63人	～廃棄物対策から地域農業振興へ～	時間: 13時30分～16時20分
本分科会の概要	<p>話題提供者 松内宏暁氏の報告概要 大木町が循環型社会のまちづくりをした経緯や理念、それを実際に住民との協同で行う取組「生ごみ分別収集」の紹介。 バイオマス廃棄物の資源化により廃棄物処理費用が削減され、また、処理により生産される液肥を地域の農業に使用し、循環が定着しつつある。循環センターはまちづくりの拠点と位置付け、今後も町民、行政、事業所と一体となって進めていく。</p> <p>話題提供者 田中宗浩氏の報告概要 生ごみ・し尿等の高含水率のバイオマスを、資源として利用する場合の各種処理方法の紹介。 そのうちの1つで、大木町の処理方法でもあるメタン発酵処理の過程でできる消化液は処理方法でコストが大幅に違う。川へ放流をするには水処理に多額の費用がかかり、一方液肥利用する場合は、コストはかからないが、地域的な条件(利用環境等)をクリアする必要がある。 また、液肥に関する情報不足により散布方法や使用方法に対する不安など課題があり、利用が進んでいない。 全国54か所のメタン発酵処理施設で生産される液肥を、水田・畑作に全量使用している所は、大木町と山鹿市の2件である。 液肥の肥料品質や肥料特性の紹介。</p>	<p>分科会参加者からの主な意見(質疑)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在、低価で販売されている液肥の価格の適正化の必要性について →まだ、液肥の利用促進には行政主導で低価も仕方ないと考えるが、将来的には民間参入も視野に入れ、適正価格については今後の課題。 ・ 液肥利用による土壌への影響については大丈夫なのか →化学肥料も同様だが、きちんと使用量を守って、使わなければならない。 ・ 収穫量は減らないのか →化学肥料よりは少し落ちる。天候が良かった昨年は、水稻はほぼ差はなかった。収量の事だけでなく、環境に優しい農業も大事。
	<p>話題提供者 遠藤はる奈氏の報告概要 メタン発酵消化液を液肥利用する事により施設の運転経費が大幅にコスト削減が図られる。また、水稻に液肥利用することにより、従来の肥料散布に係る経費も大幅に削減され、生産された米についても、特別栽培米としての付加価値が付けられ農業経営に大きく貢献する。 また、液肥散布作業による地元雇用の創出も期待される。 今後のシステム普及の課題として、エネルギー変換効率の向上、建設・維持にかかるコスト問題、消化液の利用が課題。</p> <p>話題提供者 中村勝氏の報告概要 液肥を始めて利用した時の苦労話や体験談。実際に液肥を利用して作付をしてみたの感想。肥料にかかるコスト削減につながり、近年の化学肥料の値上がりを見ると、今後は需要が高まるだろとのこと。</p>	<p>まとめの内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 液肥を利用する農家が、安心して使用できるように成分分析をきちんとおこない示す必要がある。 ・ このシステムを成功させるには、住民の方の協力なくしては成り立たず、液肥の作物利用や資源循環の意義を住民の方へ啓蒙周知を継続しておこなうことが必要である。 ・ 液肥の利用により、生産コストを削減し、農業経営を確立すると同時に、液肥で作られた農産物に対する付加価値を明確にして、きちんと評価する仕組み作りを確立することが必要である。
 <p>会場風景 (話題提供者発表)</p>	 <p>参加者からの質疑</p>	 <p>フィールドワーク (くるん見学)</p>
コーディネーター	遠藤 はる奈 (長崎大学大学院)	
話題提供者	遠藤 はる奈 (長崎大学大学院)	田中 宗浩 (佐賀大学農学部准教授)
	松内 宏暁 (おおき循環センタープラント運転員)	中村 勝 (有機液肥米 環のめぐみ生産農家)

第8分科会	【タイトル名】 木の時代がやってきた！ 森林のめぐみ・木を活かす	会場：大川市文化センター 1階研修室 (大川市)
	参加者：75人	時間：9時30分～16時30分
本分科会の概要	<p>第1部 木材はカーボンニュートラルな再生可能資源 寺岡 行雄</p> <p>第2部 FCS 認証国産材を使った家具建築 中村 展章</p> <p>杉にこだわった家具づくり 堤 良二</p> <p>家づくりから見えて来たこと 石永 節生</p> <p>第3部 薪の利用で緑の雇用—阿蘇の事例 中坊 真</p> <p>筑水園の取組み 中川 初治</p> <p>バイオマス燃料利用事例報告 三砂 誠一</p> <p>フィールドワーク (株)大川鉄工・(株)丸庄・FFC IMM WOOD</p> <p>第4部 低炭素社会における家づくりと森づくりの融合 矢房 孝広</p>	<p>全体を通してのキーワードは FSC 認証材や地元産木材による家や家具といった心身ともに健康な人間生活と自然環境を象徴する「木」。換言すれば、環境と共生した生活となる。</p> <p>隠れたもう一つのキーワードは「つながり」。「山から海へ」「山村から都市へ」の空間的なつながり。「過去から未来へ」「祖先から子どもたちへ」という時間的なつながり。また「時代の価値観を共有する」というつながりを意識することができた。</p> <p>木質バイオマスによる低炭素社会、温室効果ガス排出量削減を目指し、また、適切な森林経営から生産される木材の使用が、山村を含めた地域を健全に発展させる力になるという「時空間でのつながり」を最後のまとめとした。</p>
	まとめの区画	
		
基調報告 (寺岡行雄)	杉にこだわった家具 (堤良二)	フィールドワーク
コーディネーター	鹿児島大学農学部生物環境学科准教授 寺岡行雄	
話題提供者	中村展章 ((株)中村製材所代表取締役) 堤良二 (アール・テック (有)代表取締役) 石永節生 ((有)イシナガ建築工房代表取締役) 中坊真 (NPO 法人九州バイオマスフォーラム理事) 三砂誠一 ((株)大川鉄工代表取締役社長) 中川初治 (大川柳川衛生組合「筑水園」次長) 矢房孝広 (宮崎県東臼杵郡諸塚村企画課長)	

第9分科会		確実にCO2削減！ ～エネルギー政策と温暖化防止～	会場：大木町健康福祉センター（大木町）
参加者：57人			時間： 9時30分～16時30分
本分科会の概要	<p>話題提供者 木村浩巳氏の報告概要 低炭素自治体の構造や低炭素施策の実施状況調査結果についての報告。</p> <p>話題提供者 荒木和彦氏の報告概要 おおきグリーンファンドの活動や、学校等公共施設への太陽光発電設置、太陽光発電町単独補助制度等で相乗効果により、住民に太陽光発電設置の普及加速の取り組み説明。</p> <p>話題提供者 脇山行人氏の報告概要 佐賀県の新エネルギー普及について過去の活動や、太陽光発電住宅設置補助事業の取り組みについての報告。</p> <p>話題提供者 稲宮須美氏の報告概要 国では出来ないきめ細やかな政策を行うため、地方自治体によって低炭素地域づくり条例の策定成果と展開報告。</p> <p>話題提供者 杉野弘毅氏の報告概要 再生可能エネルギーは地球環境問題への対応、国産エネルギー活用のため積極的に推進していく。</p> <p>話題提供者 田代裕靖氏の報告概要 新エネルギーを活用し水素タウンで社会実証を行った。初期投資のコストダウンと削減費用のバランスが課題。</p> <p>話題提供者 玉木康博氏の報告概要 既存施設の光熱費削減が最大の省エネ。省エネの方法は無駄をなくすこととエネルギーの効率をあげること。</p> <p>話題提供者 谷口信雄氏の報告概要 将来17%の排出量削減に向け、都市の消費と地方の資源の地域間CO2排出量の交換によりCO2の削減を行う。</p>	分科会参加者からの主な意見（質疑）	<ul style="list-style-type: none"> ・（福岡県 男性）レジ袋有料化を国県レベルで実施してもらいたい。行政は大きな力を持っている。 ・（東京都 男性）森林による二酸化炭素の取引を検討しているところはないかCO2排出量取引状況を知りたい。 ・（東京都 男性）低炭素社会の実現に向けて地域+企業、地域+大学のみで完結せず、全体で協同していけるといい。 ・（大分県 男性）省エネ施設の資材の初期投資額と耐用年数のコストバランスを取るため、建設費用と維持管理費を合わせた工事を行うことが大切だろう。
	まとめの内容	<p>地域の中でどこが一番CO2を排出しているのか数値化して把握するのが難しい。CO2の排出＝エネルギー消費量が「見える」ようにし、「削減」していき、持続可能なまちづくりを目指していくことで低炭素社会を実現していくことができる。</p>	
			
会場の全景		話題提供者が説明している様子	質問者が発言している様子
コーディネーター	田中充（法政大学教授）、峰淳二（環境自治体会議専門調査委員）		
コメンテーター			
話題提供者	木村浩巳 （法政大学地域研究センター低炭素都市プロジェクト）	杉野弘毅 （九州電力火力発電本部火力部事業推進グループ課長）	
	荒木和彦 （おおきグリーンファンド）	田代裕靖 （福岡県商工部新産業・技術振興課企画監）	
	脇山行人 （佐賀県くらし環境本部地球温暖化対策課長）	玉木康博 （環境マネジメント研究所代表取締役）	
	稲宮須美 （条例づくり交流会議）	谷口信雄 （東京都環境局都市地球環境部課長補佐）	

第10分科会		会場: 勤労者家庭支援施設 (筑後市)
参加者: 47人		時間: 9時 30分～ 12時 30分
本分科会の概要	<p>話題提供者 丸谷氏の報告概要</p> <p>ISO登録自治体は、減少傾向にある。2004年のピーク時で514件、2009年では269件である。環境マネジメント効果としては、紙、ゴミ、電気負荷削減、しかし他のシステム(地球温暖化防止計画)との統合がうまくいっていないのが現状である。また、市民への啓発は少なめという結果になっている。</p> <p>話題提供者: 大崎氏の報告概要</p> <p>ISOを市民全体に普及するために工夫を行っている。「学校版ISO」、「保育園、幼稚園ISO」、お店版(エコショップ)、家庭版環境ISO(エコダイアリー)を取り組んでいる。その他にも、市民監査委員会で行われているエコスター評価を市長のマニフェストなど重要政策評価システムにも応用していく。</p> <p>話題提供者: 大西氏の報告概要</p> <p>各部署間での環境意識での温度差が見受けられる。模範の部署をつくるのが好ましい。また、情報発信が一方向的、相手側の反応を見ることが大事になってくる。</p>	<p>(東京八王子からの参加者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境基本計画の項目数は→101項目 ・市民監査を具体的に教えてほしい→67施設あって、現場に直接行く。報酬は、1日5,900円。酵母が少なく慣れ合いの監査が多い。だから、監査員のレベルアップが必要。市民監査を通して市民に環境に対する意識を深め、より参加するチャンスにつなげる。 ・エコダイアリーの普及率は→2000年82世帯、去年100世帯。普及していないというのが現状。 ・市民に対する告知は冊子以外では→図書館での環境レポート、白書など
		<p>分科会参加者からの主な意見(質疑)</p> <p>まだまだ環境に対する意識が全体的に低すぎる。意識の底上げが必要。若い頃から楽しく環境について学べる教育の整備も必要になってくるのではないかと</p>
		
真剣に聞く参加者		白熱した討論
		発表にも熱が入ります
コーディネーター	二渡 了 (北九州市立大学大学院国際環境工学研究科教授)	
コメンテーター		
パネラー	丸谷 一耕 (NPO法人木野環境 代表理事)	大崎 伸也 (水俣市環境対策課 主査)
	大西 恵三 (内子町環境整備班 主査)	

第11分科会	持続可能な地域を支える交通政策 ～弱者と環境にやさしい交通システム～		会場： 勤労者家庭支援施設（筑後市）
参加者： 49人			時間： 13時00分～16時30分
本分科会の概要	<p>《話題提供者》上岡直見の報告概要 車社会が市民の生活の質を低下させる要素となっており、市民の暮らしと地域経済を支える持続的な交通が問われている。自動車利用可能者は不可能者と比較して、行先地数で2.6倍、買物移動距離で約2.5倍の差がある。近年は、公共交通も使えない人も現れており、自立した交通が課題となっている。</p> <p>《話題提供者》橋本昭/中津翔太/寺尾剛の報告概要 魅力ある空間づくりには、市内の自動車抑制は必然。パーク&ライドで通勤すれば中心街の活性化につながる。そのためには、供用自転車の活用が有効であり、水色の自転車の会の不要自転車の回収、再生、配備の活動報告があった。1,000台の共用自転車の10%が常時使用されれば、自動車の走行を10%削減、排ガス12.5%削減、集客力を12.2%高めることができるとの研究報告があった。</p> <p>《話題提供者》松竹卓生の報告概要 平成15年7月から、しもつま福祉バス「みどり号」を週4日運行している。バスは市が配備し、運行等の運営資金は補助金、負担金、寄付金で賄っている。高齢者等地域の交通弱者を地域で支える方式の紹介があった。</p> <p>《話題提供者》松村友記の報告概要 熊本電鉄の鉄道線のライトレールへの改良やバス等との接続の改良など過度に車に頼らずに人が移動できる環境整備への改善計画の紹介があった。</p> <p>《話題提供者》下村仁士の報告概要 九州新幹線の開通を控え、地域内、地域間交通との連結を図る必要がある。新幹線を活かした地域づくりのためには、自治体、市民、交通事業者相互の連携が必要との報告があった。</p> <p>《話題提供者》三浦逸朗の報告概要 GPS携帯電話を活用してCO2削減量を自治体に取りまとめ、国内クレジット市場において取引可能なシステム構築を検討する。試行では、エコドライブにより最大18%の改善が見られたとの報告があった。</p>		分科会参加者からの主な意見（質疑） <p>○本年4月からボランティアでの地域バスの運行を始めたが、利用者の利用時間が重複し乗車できない人が出ている。しもつま福祉バスでは、どのような対応をしているか。 ⇒定員が限られているので、乗車できないときは、最初の人が降車した後に迎えに行っている。</p> <p>○地域バスは市がリースで借りており、事故発生時はリース会社が修理するが、事故取扱で警察の現場検証とかで運営できなくなる時があるが、その時の対応は。 ⇒保険でみてもらえない部分は市が責任を持つこととしている。事業規程に明確に明文化している。</p> <p>○自転車が加害者になる事故も近年発生している。自転車にも保険があればいい。</p> <p>○九州新幹線開通で特急が停車しない恐れがある。現在、大牟田までの快速を熊本まで伸ばす方が欲しい。自治体で連携した運動を行いたい。</p>
			まとめの内容 <p>地域を支える交通政策を考える上で、3つの問題がある。①財源と制度の問題で、費用をどう負担するのか。②総合的な交通体系を考える仕組みを作る必要がある。③交通の実態、基本的なデータが不足しており、データがあれば様々な利用が可能になる。今後、参加者の情報交換を進めていく。</p>
			
分科会風景	松竹卓生さんの発表	下村仁士さんの発表	
コーディネーター	上岡直見（環境自治体会議環境政策研究所主任研究員）		
コメンテーター	佐々木龍（愛知県新居浜市長）、松村誠一（福井県勝山市副市長） 中村征一（福岡県筑後市長）		
パネラー	橋本昭/中津翔太/寺尾剛（久留米大学学生/水色の自転車の会会長・副会長）		
	松竹卓生（しもつま福祉バス運営協議会事務局長）	松村友記（熊本電鉄株鉄道事業部鉄道事業部長）	
	下村仁士（交通権学会九州沖縄部会長）	三浦逸朗（NPO 地域環境ネットワーク）	

第12分科会		「水と緑と命のつどい」	会場:樋口軒 (筑後市)
参加者: 58人		～矢部川と船小屋の大楠を見つめて～	時間: 9時 30分～ 16時 30分
本分科会の概要	<p>話題提供者 馬場紘一氏の報告概要</p> <p>矢部川両岸に残る、堰と廻水路は、久留米藩と柳川藩の取水の智慧を物語る。洪水は、被害だけでなく、肥沃な土壌ももたらす。植栽によって堤防を守ろうとした先人の治水技術の叡智は、現在も学ぶべきものがある。</p> <p>話題提供者 小森耕太氏の報告概要</p> <p>住んでいる黒木町は、人工林の割合が高く、森林棚田の荒廃が進んできている。都市と農村が一体となり、水や食を育む里山環境を守る活動を行う山村塾を起し、里山の保全と生き方の見直しに取り組んでいる。</p> <p>話題提供者 安西 司氏の報告概要</p> <p>船小屋温泉の泉質は温度20度前後の冷泉で、太古の動植物が長年積み重なって堆積した非火山性の炭酸水であると言われている。鉱泉ってなに、という疑問から、船小屋の資源を守り、活用する活動が生まれ、発展している。</p> <p>話題提供者 大石英雄氏の報告概要</p> <p>筑後広域公園の矢部川周辺で観察できる生き物を、写真を使って紹介。便利になる分、生き物のすみかが奪われるとの意見もあったが、まだまだ、多くの生き物が確認されており、フィールドワークへの興味をかき立てられた。</p> <p>コーディネーター 大谷妙人氏のまとめ</p> <p>水と緑と命、切っても切れない関係性がある。先人に学んで、風土を有効に生かしていくことが使命である</p>	<p>参加者</p> <p>安西氏の話やパンフレットで気になっている。すずめ湯について詳しくお聞きしたい。</p> <p>・本年2月オープンし、地元住民利用、無料開放を経て4月から350円で公開している。連日100人を超える利用者があり、特に体感者のリピーターが多い。冷泉を沸かすため、炭酸が少し抜ける。抜けないように加温するためにも実験中。効能は、メカニズムはまだ解明にいたってはいないが、血流がよくなること。人工透析学会も注目している。もっとアピールに努めたい。</p>	<p>分科会参加者からの主な意見(質疑)</p>
	<p>まとめの内容</p> <p>水と緑と暮らしのバランスを壊してはいけない。水と緑の大切さを参加者みんなで、再認識し、地域の自然の保全に向けて取り込むことが、みんなが住みやすいまちづくり、大切な命につながる。誰もが幸せに暮らしていける22世紀の水と緑と命を守る地域社会を作ってほしい。</p>		
			
午前部の報告	パネルディスカッション	フィールドワーク (船小屋鉱泉)	
コーディネーター	大谷 妙人 (NPO法人グラウンドワーク福岡事務局長)		
コメンテーター			
パネラー	馬場 紘一 (八女市文化財専門委員)	小森 耕太 (山村塾)	
	安西 司 (船小屋・長田鉱泉保存会)	大石 英雄 (NPO法人 まちづくりネットワークちくご)	

第13分科会		「ごみとわたしたちの暮らし」		会場：筑後市勤労者家庭支援施設第6講習室（筑後市）		
参加者：53人				時間：9時30分～12時30分		
本分科会の概要	<ul style="list-style-type: none"> ● コーディネーター 中村修氏報告 「ごみ分別授業」の意義と実施手順について、今までの継続性のない環境教育の例を紹介し、筑後市内の全小学校（11校）4年生のクラスで、「ごみ分別授業」を実施していることを、①環境教育②社会科の授業③環境行政の啓発事業の視点で紹介された。 ● 話題提供者 岩熊徹氏報告 筑後市におけるごみ減量への課題、ごみ袋代の値上げに伴うごみ減量等への取り組みを報告された。取り組みのなかのひとつに環境教育（分別学習）があり、市内小学校11校の4年生がごみの分別について学習していきワークブック作成委員会にてつくりあげたワークブックを活用し筑後市のごみ分別について学んでいることが報告された。 ● 話題提供者 平川雅道氏 平成20年度より社会科の授業のなかで専用のワークブックを活用したごみ分別授業をおこない、学校や家庭でごみを調べたり、ごみ分別テスト、クリーンセンター・リサイクルプラザの見学しごみ分別のシミュレーションゲームなどを実施し子どもたちの分別知識の向上を図るとともに自分たちのできることを考え、ごみ問題かかわろうとする主体性を育てることなどを報告された。 ● 話題提供者 古賀孝敏氏 「小学校社会科教育に見る環境教育」の観点から、この授業は指導要領を踏まえた筑後市にあった学習課題であること。小学校の社会科にて学習することは教育の目標、教科書に見る小学3～6年の「環境」に関する内容、「廃棄物の処理」の学習におけるワークブック作成と活用の意義など五つの要点について説明された。 		分科会参加者からの主な意見（質疑）		<ul style="list-style-type: none"> ・（古賀市からの参加者）古賀市でもワークブックによる授業を取り組んでもらいたい。このワークブックを雛型にしてよいか？ →ひとつの雛型として活用されるのは構いません。 ・（鹿児島県からの参加者）中学でも環境の授業を実施できないか？ →実態把握していないのでわからないが、中学校は小学校と指導要領が違い、また、社会科は地理、歴史、公民の教科となるのでそのまま活用することはできない。 ・（大野城市からの参加者）ワークブックの策定委員会について、開催回数、時間帯は？ →平成20年度に委員会は5～6回開催し、期間は半年程度であった。時間帯は3時半からであった。過重な負担ではなかった。 	
			まとめの内容		<p>筑後市では、11小学校すべての4年生が、「ごみ分別授業」を受けているという意味で画期的であり、その結果、分別能力が確実に向上した。</p> <p>今後は、児童を通じて保護者、地域への展開も検討する。このような効果的な啓発事業は、行政のとりくみとして今までなかったと思われる。さらなる充実を図っていきたい。</p>	
						
報告を真剣に聞く参加者		コーディネーター熱弁中！		参加者より賛同のご意見を頂く		
コーディネーター	中村修（長崎大学大学院生産科学研究所准教授）					
コメンテーター						
パネラー	岩熊 徹（筑後市かんきょう課かんきょう係）		平川 雅道（筑後市立水洗小学校教諭）			
	古賀 孝敏（筑後市教育研究所所長）					

第 14分科会	微生物から見た地球	会場:サザンクス筑後 (筑後市)
参加者: 71人	～循環の隠れた立役者～	時間: 9時30分～16時45分
本分科会の概要	<p>1 竹熊先生の報告概要 高度経済成長期から日本人は経済を重んじてきた。その結果、命が削られている。たとえばBSEの問題。牛に牛を食べさせたことにより、牛の成長が促進され、人間は多額の利益を得ることが出来たが、恐ろしい問題を引き起こしている。</p> <p>2 河内先生の報告概要 自然界は生産者、消費者、分解者が共存することで成り立っている。それを忘れ、薬剤などを使い、分解者を死滅させてきた。その結果、O-157等の問題が起き、人は自らの首を絞め続けている。</p> <p>3 原先生の報告概要 保湿力の高い納豆菌は、とてつもない可能性を秘めている。たとえば、おむつ、化粧品、砂漠を緑にするプロジェクトなどである。</p> <p>4 八女水の会、水の会平野さんによる水の浄化の報告概要 EM泥団子、えひめA Iによる水の浄化により、河川のヘドロが少なくなり、川の水が浄化された。炭素繊維による浄化実験はデータのあまり変化は見られなかったが、近隣の人が川に関心を持つようになった。</p> <p>5 八女高校生物部によるガマ池の浄化研究 排水溝を作り、水位を低くした結果、ガマが繁殖し、水質も改善された。</p>	<p>分科会参加者からの主な意見(質疑)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・EM菌とえひめA Iの違いは? →入っている菌に違いがある。 ・土の団粒構造をつくる生物はミミズだけか? →ダンゴ虫など他にもいる。 ・堆肥を作ったとき暖かいのはなぜか? →微生物が増え、活動が活性化されることにより、熱が生まれる。 ・腸内細菌はどれくらいいるのか? →100兆以上は存在する。 ガマ池はこれからどうあるべきか? ・(八女高生) 現在は排水溝を設置するなどして人の手によって管理されている。元の自然の姿で成り立ってほしい。
	<p>まとめの内容</p> <p>人間が自分たちの価値観(経済第一主義など)で自然とかかわってきた。その結果、微生物が死滅したり、また、突然変異して、地球環境や、そこで暮らす我々に牙を剥いている。これからの人間の価値観を見直すべき時期に差し掛かっている。</p>	
 <p>分科会風景</p>	 <p>竹熊宣孝先生の講演</p>	 <p>フィールドワーク(ガマ池)</p>
<p>コーディネーター コメンテーター</p>	<p>木庭慎治(福岡県立八女高等学校生物部顧問)</p> <p>竹熊宣孝(菊池養生園 名誉教授)、河内俊英(久留米大学医学部 自然科学教室 生物学准教授)、原敏夫(九州大学農学部 農学研究院 遺伝子資源工学部門 遺伝子資源開発学講座准教授)、牛島孝行(八女水の会 会長)、平野幸二(水の会)、川原大基/松竹崇志(八女高校生物部)</p>	

第15分科会	【タイトル名】 ちっご掘割物語	会場:大川市文化センター2階和室(大川市)
参加者:80人	～掘割の優れた機能を検証する～	時間:9時30分～16時30分
本分科会の概要	<p>筑後から佐賀平野の低平地に張り巡らされた「掘割」。かつて生活・農業・防火用水など様々な形の活用がされてきた。しかし、上水道の普及、幹線水路による農業用水の確保など、その用途は大きく様変わりし、地域の田園自然環境、地球温暖化対策を考えると、新しい「掘割」とのつきあい方が求められている。</p> <p>このことを踏まえ、今後の「掘割」とのつきあい方について、意見交換、議論等を行われた。</p> <p>○柳川の「掘割」検証（どんこ舟乗船、掘割視察等）</p> <p>○全国の「掘割」等事例紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大川市「アクアリング委員会」 ・大木町「堀と自然を守る会」 ・柳川「水の会」 ・NPO 法人掘割再生まちづくり新潟 <p>○意見交換、まとめ</p>	議論の方向性
分科会参加者からのご意見（質疑）		
<p>【質問】</p> <p>下流域で水をきれいにする取組みを行っても、上流域からごみなどが流されれば、どうにもならない。</p> <p>【パネラーからの助言等】</p> <p>① 子供同士での上下流域の交流を行い、子供たちに水の流れ、大切さを理解してもらおうと努める。具体的には、山で育つ木々が海の魚介類を育てるなど、上流域での取組みが下流域、あるいは海までつながっていることを交流の中で理解してもらった。</p> <p>② 現在の経済・効率性を優先する社会では、水の浄化に対する取組みは中々難しい。そういった中で、次代を担う子供たちへの啓発を地道に続けていくことが、環境浄化に寄与すると考える。</p>		
		
【会場は多くの参加者で埋められた】	【活発な意見交換が行われた】	【どんこ舟に乗船し、柳川「掘割」の検証】
コーディネーター	土谷 光憲（NPO 法人自然環境復元協会 理事）	
パネラー	山口 徳雄（柳川「水の会」）	川上 伸一（NPO 法人掘割再生まちづくり新潟）
	今泉 博国（大川市「アクアリング委員会」）	
	野田 昌志（大木町「堀と自然を守る会」）	

第16分科会 参加者：50人	【タイトル名】 むつごろうの棲む筑後川の環境特性 ～日本一の干満差と川の恵み～	会場：ワークピア大川（大川市） 時間：9時30分～16時00分
本分科会の概要	<p>○環境と観光 久留米大学経済学部教授 駄田井 正 「地球にやさしい」とは、地球から人間がいなくなることである。環境がよくなれば観光は増える。そこで、重要なことは「自然との共生」である。そこで、人間社会には、征服主義と順応主義があるが、両主義を合わせ持つことが「自然との共生」であり、日本人の美意識を高めることである。</p> <p>○筑後川と環境対策 筑後川河川事務所 事業対策官 村上博 筑後川のゴミは有明海の海岸に漂着し、鳥に絡みつく等の影響を及ぼす。特に多いのは、不法投棄（引越ゴミ、家電ゴミ）であり、日々、パトロールを強化し行っている。 また、ノーポイ運動やアダプト制度でボランティアの輪も広がっている。</p> <p>○筑後川まるごとリバーパーク構想の展開 筑後川流域連携倶楽部 鍋田 康成 自然をそのまま活かしたテーマパークとして、流域のすばらしい自然、環境、文化、歴史、生活等をツアーを通じて伝えていきたい。</p> <p>○有明海の生き物たち 大川漁業（協） 古賀 雅敏 スライドにより、エツ、竹崎カニ、メカジヤ等を紹介され、有明海の環境の変化について説明された。特に「人が考えるきれいな水と、自然界のきれいな水は違うものではないか」との提起がなされた。</p> <p>○筑後川の下流域のゴミの特徴とその活動 大川未来塾 本間 雄治 浮遊ゴミの調査や船による回収を行っている。浮遊ゴミは支川から流れ込む本川下流域地点の支川が市街地の多くを経由するエリアに生活系ゴミが多い。移動については、本川の潮目に沿って移動する。 今後の課題として、「映像による浮遊ゴミの実態」を早急に流域に情報発信することである。</p>	<p>昔に比べて魚が少ないのは、治水・護岸が生物へ負荷を与えている影響があると考えられる。また、家庭排水による影響を調査する必要があるが、特に、中性洗剤、農薬が生物に及ぼす影響は大きいだろう。</p> <p>そこで、家庭排水や家庭からのゴミを減らすことが重要であり、行政が行うには限界があるため、地域住民自らが問題意識を高め、住民を含めた市全体で考える必要がある。</p> <p>この第16分科会では、家庭ゴミを減らすために、市民意識を高め取り組んでいくことを発信していきたい。</p> <p>【フィールドワーク 筑後川クルーズ】 今のむつごろうが40年後、50年後も棲み続ける海に、私たちがやっていかなければならない。</p>
	 <p>分科会の様子</p>	 <p>コーディネーター、パネラーによる説明</p>
コーディネーター	久留米大学 経済学部教授 駄田井 正 氏	
話題提供者	【筑後川河川事務所 村上 博 氏】【筑後川流域連携倶楽部理事 鍋田 康成 氏】【大川漁業（協）組合長 古賀 雅敏 氏】【大川未来塾理事 本間 雄治 氏】	

第17分科会	【タイトル名】 環境自治体なら「弁当の日」をやらなくちゃ	会場: 国際医療福祉大学福岡リハビリテーション学部（大川市）
参加者: 196人	時間: 9時30分～12時30分	
本分科会の概要	<p>○スライドによる、助産師 内田美智子氏の訴え 生・性・食はつながっている。命の生まれてくる有難さと尊さを考えた時に、食の大切さに気付く。コンビニ弁当を食卓に並べても家族への愛は伝わらない。食卓は愛情の無言のメッセージである。</p> <p>○保育士さんへの調査で浮かび上がってきたもの 朝食抜き、外食、インスタント食品が多い食卓。果物や野菜の原型を知らず、手作りおやつを好まない子どもたち。それは子どもの問題でなく、若い両親の問題。</p> <p>○西日本新聞「食卓の向こう側」調査 佐藤弘氏の報告 今どきの大学生は、朝食なし、昼スナック菓子、夜インスタントラーメン等の食事が毎日続く。理由は料理そのものの経験・知識の不足、多忙など考えられるが、問題なのは、こんな食生活をしていて将来、自分だけでなく子供の体への影響が分かっていないこと。例えば、ほうれん草等に含まれる葉酸は、妊娠のごく初期に不足すると奇形の高リスクが高い。野菜そのものの栄養価も50年前から比べると下がっている。有機野菜は栄養価も高く、生命力が強い。</p> <p>○弁当の日 香川県滝宮小学校長 武下和男先生の取り組み 月1回弁当の日には5年生以上の子が自分で弁当を作ってくる。体験を通して子は学び、食の大切さを感じていく。下級生たちにも教育的効果が。給食の残食率も、平均20%が0.2%ほどに激減した。好き嫌いは無くならないが、嫌いでも食べる。作ってくれる有難さ分かる。「弁当の日」は全国に広がり、現在550校が実施。中学・高校や会社員の間でも広がっている。</p>	まとめの内容 <ul style="list-style-type: none"> ・体験のない食育は意味がない。作る人の気持ちがわかる子どもは食べ物の文句を言わない。自分のために並ぶ料理に含まれる愛情を感じ、感謝する子になる。 →料理は、やさしい子どもたちを育て、ひいては環境にやさしい子どもを育てる。 ・「弁当の日」導入に当たって、できないことを並べるのではなく、できるように工夫することが大事。学校や先生も頑張っている。 ・「医は食に、食は農に、農は自然に学べ」（竹熊先生）。食は栄養価だけでなく、排泄して土に返し、そこから作物を育て、食につながる。「循環」が大切ではないか。 ・食べ物は次世代に大きな影響がある。体に良い食べ物をとることが大切。 ・農薬を使わない、環境にやさしい農業には、消費者がそれを購入することが必要。食から見直すこと。
		
コーディネーター	九州大学大学院農学研究院 助教 佐藤 剛史 氏	
話題提供者	西日本新聞社 編集委員 佐藤 弘 氏	

第18分科会		環境支払の政策を地域からつくる	会場:大川市文化センター洋会議室 (大川市)
参加者: 61人			時間:13時30分~16時50分
本分科会の概要	<p>○新潟県 堀井 修氏の報告</p> <p>現在の農政は国から地方へという中央集権的システムが限界に来ている。これからは地域の現場から声を上げて施策に取り組まなければならない。環境支払いにおいても何が当てはまるのかについて個人の意見を集約し政策に取り入れる必要がある。</p> <p>○横浜市農業委員会 浅井幸雄氏の報告</p> <p>意外にも農業が盛んな横浜市には、農のある街づくりを応援し参加する市民の存在がある。さらに21年度より「横浜みどり税」導入により財源を確保し市全体で農と緑を一体的に守る体制が整えられつつある。</p> <p>○九州大学・農学部 佐藤剛史氏の報告</p> <p>ドイツでは農業が持つ特別な価値への理解が進んでおり、公共財としての農地を守るための取組がある。ある州の8割の農家は自由参加・ポイント制の直接支払制度に参加し、結果草地の減少に歯止めがかかっている。</p> <p>○生物多様性農業支援センター 原 耕造氏の報告</p> <p>農業が食糧を生産するだけでなく、命の生産もしているという意識の転換が必要。農業の環境貢献を評価する田んぼ支払システム導入は生産者・消費者双方にとってメリットのある運動となる。</p> <p>○元農と自然の研究所 宇根 豊氏の報告</p> <p>蛙やトンボなど農の恵みとしてあたりまえに生じる自然を皆で大切にしようという公共意識が必要。それを前提に失われる自然に歯止めをかける百姓仕事環境支払の対象となるのでは。</p>	<p>分科会参加者からの主な意見(質疑)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(千葉市からの参加者) やる気のない農家、農に関心を持たない市民へのインセンティブをどうしたらよいか。 ・(厚木市からの参加者) 農業のメリットが市民全体に届けば増税も納得されるだろう。 ・(大川市の参加者) 現在減農業での農業に取り組んでいるが、環境に優しいものでも収入が見合わなければ取組の継続はなかなか難しいと感じる。 ・(茨城県からの参加者) 農業の担い手が減り農地が拡大されると、機械や農薬、肥料へと投資がされる。こういった現状から脱却する方法は。→米価が下がれば農地を手放す者が増える。農家を応援する消費者を増やすことが大事。 	
	<p>まとめの内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地方が政策を立案する能力を持つ仕掛けを国がつくる。自治体は知恵を出し合い住民参加により政策を組み立てていく必要がある。 ・環境支払いの財源には、新税の検討も必要だが、当面は現行予算のやりくりで対応。 ・環境保全に対してお金を払うという意識をどのようにして一般に定着させていくかが課題となっている。 		
			
参加者からの質問	話題提供者からの報告	分科会の様子	
コーディネーター	宇根 豊 (百姓・元農と自然の研究所)		
話題提供者	堀井 修 (新潟県・元農業改良普及員)		浅井幸雄 (横浜市・農業委員会)
	原 耕造 (生物多様性農業支援センター理事長)		佐藤剛史 (九州大学・農学部)

第19分科会	農村再生！本当の豊かさは農村にある ～地域をどげんかせんといかん～	会場：大木町総合体育館会議室（大木町）
参加者：68人		時間：9時30分～16時30分
本分科会の概要	<p>話題提供者 広松謙伸氏の報告概要 若手グループによる農事組合法人ドリームマッシュの会社設立までの経過、現在の経営状況について、苦労話も交えて報告。また、地域農業の将来を考え、希望ある農業を目指し、5年前に米・野菜栽培の法人を設立し土地利用型作物栽培に取り組んでいる</p> <p>話題提供者 古野隆雄氏の報告概要 合鴨農法を取り入れた有機農業への取り組みについて、現在取り組んでいる事例を交えて報告。また、地域のつながりは、人間の循環である。担い手に任せるのではなく地域の多くの方が農業に携わることにより地域ができるのではないかなどのお話がある</p> <p>話題提供者 中島宗昭氏の報告概要 安全で安心な農業生産、きのこの菌床オガクズを利用した堆肥を使った土づくり、地域循環環境保全型農業への取り組みについて報告 また、農園を作り保育園児など地域との触れ合いを大事にしていると報告</p> <p>特別報告者 徳野貞夫氏の報告概要 農業・ヒト・環境問題が結びつくことにより地域再生ができるのではないかと、どうしたら農業者人口を増やすことができるか、農業をしている方の研究などについて資料をもとに報告</p> <p>特別報告者 水落重喜氏の報告概要 仲間間で知恵と力を合わせる。また、若い人や女性の意見を吸い上げること、栽培技術、販売、財務の専門家を養成する取り組みなどが農業経営には必要と報告。</p>	<p>分科会参加者からの主な意見（質疑）</p> <p>Q どういうふうになれば後継者が残るのか 後継者をつくるにはどうしたらいいか A 小さなときから農業を体験させる A 地域でうまくいっている人より学ぶ Q 農地保全の方法は A 地域でできることにも限界がある、農地を国の大事な財産と考えるならば国は農地を保全している農業者への個別所得補償など考えてほしい Q 農業を地域の人とうまくやる方法は A 思い立ったものから組織を作って動き始める。そこには、女性の力も大きくかわる。</p>
		<p>まとめの内容</p> <p>地域を守るには、農業者が地域の人の理解を得るために、いろんな仕掛けをすることが必要であり、発信をすることが大事。 農業が果たす役割を積極的に地域の人にいろんなやり方を使い訴えることが必要である そこから農業への関心を得るようにする。誰かに任せるのではなく、そこに住む人が行動を起こすことが大事。</p>
 <p>話題提供者からの質問に手を挙げる参加者</p>	 <p>話題提供者から参加者への回答風景</p>	 <p>フィールドワーク（農地見学）</p>
コーディネーター	八尋 幸隆（百姓・福岡県有機農業研究会）	
コメンテーター	中田 仁公（大阪府交野市長）、稲田 繁（愛媛県内子町副町長）、	
特別報告者	徳野 貞雄（熊本大学文学部総合人間学科教授）	
話題提供者	古野 隆雄（百姓・全国合鴨水稲会世話人代表）	水落 重喜（農事組合法人きのこの里理事長）
	広松 謙伸（農事組合法人ドリームマッシュ理事長）	中島 宗昭（有機農業研究会理事）